

新出資料・林原美術館所蔵『隣女和歌集』（巻一）三本の紹介

坂本美樹

一 はじめに

『隣女和歌集』（以下、「隣女集」）は、鎌倉時代中後期の歌人飛鳥井雅有の家集である。その伝本については数多く報告されているが、四巻の完本は江戸期書写の内閣文庫蔵本と群書類従巻二四三の一本のつごう二本のみで、その他は巻一を欠くか巻二のみの零本が多い。巻二が多く残存していることに関して、『新編私家集大成』の解題を担当した濱口博章氏は、「阿波国文庫旧蔵本の奥に「右隣女和詞集者飛鳥井雅有卿家集也、此冊巻第二自文永二年至同年云々、而今巻付略之、始末可為不足逐求他本可増補者也」とあるように、巻二に相当する一冊が流布していたもののようにある。」と述べている。一方、巻一に関しては現在のところ、先述の内閣文庫蔵本（江戸初中期書写）と群書類従本（江戸中後期書写）、そして桃園文庫本（江戸後期）の三本しか確認されておらず、今後の発見が期待されていたが、このたび、平成二十八年年度関西大学研究拠点形成支援事業（代表・与謝野有紀教授）のプロジェクトの一環として林原美術館の和歌資料を調査したところ、巻一について新たに三本の資料を

確認することができた。そこで本稿では、新出本三本の紹介とその本文の特色について検証したい。

二 林原美術館蔵『隣女和歌集』三本の書誌について

ここでは、今回確認できた三本の書誌について記す。

I 池田光政筆『隣女和歌集』巻一（寛文十二年六月書写本）

袋綴、四半型の冊子本。一冊。整理番号「書跡五〇五―二」。桐外函中央に「光政公御筆／雑書」、右肩上部「準備／光政公／雑甲第三八四號／十七筆」という貼紙がある。包紙には、中央に墨筆で「光政公御筆／五筆／隣女和歌集 一冊／△」と書かれている。また右肩上部に「故大御納戸」と書かれた貼紙があり、さらに右肩中央部には朱で「本一号／一ノ二内二」と書く。表紙は朽木色の原表紙。外題は表紙左肩に「隣女和歌集」と墨筆にて打付書にする（本文同筆）。見返しは本文共紙。寸法は縦二一・六cm×横十五・八cm。本文の料紙は斐楮混漣。前後に遊紙が一

丁ずつあり、墨付二十七丁の全二十九丁からなる。序文と和歌本文を有しており、どちらも一面九行詰め。和歌は一首二行書き（上下句分ち書き）にされ、部立は和歌よりおよそ二字下げ。墨筆にて集付けあり。歌の上下に墨・朱筆にて合点が付されおり、十七丁ウラの六行目下部（一〇二番歌末尾）には、朱の合点を擦り消した痕跡がある。当該本の末尾に「此一冊者参議藤原雅有卿之以／自筆本書写之畢／寛文十二壬子曆林鐘下旬／五筆」という書写奥書があり、署名はないが函書から池田光政筆と思われる。仮名序、本文、本奥書、書写奥書の順で構成されている。

II 池田光政筆『隣女和歌集』巻一（寛文十二年十一月書写本）

綴葉装、やや小四半型の冊子本、一帖。整理番号「書跡五〇一一一四」。桐外函ヨコに右から「書／一六三」「準雑甲／自50／至53／癸四」「準雑甲48／光政公／癸四」「準雑甲／自33／至45／癸四」と四枚の貼紙あり。包紙は墨筆で「隣女和歌集」と書かれ、さらに右肩上に「準雑甲48／光政公／癸四」と墨筆で書かれた貼紙がある。表紙は茶色の原表紙。外題は、表紙左肩に墨筆で「隣女和歌集」と題簽書き（本文同筆）。見返しは金銀砂子を霞引きした鳥の子紙。寸法は縦十九・六cm×横十五・三cm。本文の料紙は鳥の子紙を用いる。全体は二括からなり、一・二括ともに八枚の紙を折った全三十二丁。そのうち前に二丁、後に三丁の遊紙がある。墨付は二十六丁。当該本も序文と和歌本文を有し、一面九行詰め。和歌は一首二行書き（上下句分ち書き）にされ、部立は和歌より一字下げ。Iと同じく、集付けと合点が付されている。当該本も末尾に書写

奥書を有しており、「此一帖者参議藤原雅有卿之以／自筆本書写之畢／寛文十二壬子年仲冬念四」とある。筆跡はIに比べてやや繊細な風であるが、函書に加えてIの書名の筆跡との一致から池田光政筆と考えてよいだろう。当該本もIと同様に仮名序、本文、本奥書、書写奥書の順で構成されている。

III 池田綱政筆『隣女和歌集』巻一

卷子本。一軸。整理番号「書跡二九三一一二」。桐外函中央に「綱政公御筆」、右肩上部に「準備／甲卷／第／自八九／至二五四／號」との貼紙あり。包紙は中央に墨筆で「綱政公御筆／隣女和歌集」と書く。「準備／甲卷／題一〇九號」「準卷公一〇九／壬二」「故大御納戸」「明治八年五月□」といった四枚の貼紙がある。「準備／甲卷／題一〇九號」と書かれた貼紙の下には、朱筆で「卷五二ノ／四十三内廿七」と書かれている。また、中央部に「廢」という朱の印があり、この印から当該本は明治期か大正期あたりに廃棄される予定であったことが窺われる。表紙は芥子色に雷文繫ぎが描かれた原表紙。外題は、墨筆で「隣女和歌集」と打付書き（本文同筆か）。見返しは一面全体に金箔が貼られた贅沢な仕様。寸法は縦二一・八cm（軸長二二・七cm）×横全長六七・二cm。本文の料紙は鳥の子紙を用いる。当該本も序文と和歌本文を有し、和歌は一首二行（上下句分ち書き）、部立は和歌より一字下げに書く。天地に墨筆で界線あり。当該本も前二本と同じく墨筆による集付けと、墨・朱筆の合点が付されている。こちらも署名はないが函書から池田綱政筆と考えられる。また、当該本は書写奥書がなく、仮名序、本文、本奥書の順で構成され

ている。

以上、林原美術館に所蔵されている三本の「隣女集」について、その書誌を記した。当該資料に関して最も注目される点は、三本のうち二本が書写奥書を有し、しかもその書写年代が江戸初期（寛文十二年）と、現在残っている巻一のみで最も古い可能性があるという点である。先述のとおり、巻一の伝本については、内閣文庫蔵本、群書類従本、桃園文庫本の三本が伝わっているが、書写奥書は残っていない。さらに奥書には、作者自筆本をもって書写した旨が記されていることから、当該本は、大変資料的価値の高い伝本であるといえよう。

それでは、林原美術館所蔵「隣女集」三本の本文にはいったいどのような特色があるのだろうか。光政筆本の二本は書写奥書があることから、その書写年代は明らかであるが、底本が同じかどうかについては不明である。また、綱政筆本については書写奥書がないため、その前二本との関係についてはさらにはつきりとしれない。そこで、次章では三本の本文異同から、その特色を検証したい。

三 本文の特色

林原美術館所蔵「隣女集」三本を書写年代順に並べると次のとおりである。

- (I) 光政筆寛文十二年六月書写本（以下、「六月本」とする）
- (II) 光政筆寛文十二年十一月書写本（以下、「十一月本」とする）

(III) 綱政筆本（以下、「綱政本」とする）

右三本の異同について調査したところ、24の異同が確認できた（なお、仮名遣いや漢字の相違による異同は含めていない）。

これらの異同のうち、六月本と十一月本は一致するが、綱政本と対立する箇所は次のとおりである。

【表一】六月本と十一月本は一致するが、綱政本と対立する場合

頁	番号	六月本	十一月本	綱政本	備考
3オ②	序	哥のほひ	哥のほひ	言のほひ	
3オ③	序	ふるき言	ふるき言	ふるき哥	
3オ④	序	たかひかめる	たかひかめる	たかひかめる	
5ウ⑥	6	よそのかすめる	よそのかすめる	さとのみ霞む	六月本、十一月本は右に「サトノミカスム」と記す
11オ⑥	54	ちくさの花は	ちくさの花は	ちくさの花の	六月本、十一月本は「は」の右に「の」と見せ消す
15ウ⑤	93	さひしさを	さひしさを	さひしさは	綱政本は「は」の右に「を」と記す
17ウ④	110	うち川の水	うち川の水	宇治の河水	綱政本は「宇治の」の「の」を見せ消す。さらに「河」と「水」の間に「の」の補入記号あり
19ウ②	127	たのめてもこぬ	たのめてもこぬ	たのめてこぬ	政綱本は「て」と「こ」の間に補入記号あり
20オ⑤	133	こひしなは	恋しなは	恋しなん	政綱本は「ん」の右に「は」と記す
25ウ④	181	すみかたのみや	すみかたのみや	すみかたの世や	綱政本は「世」の右に「み」と記す

※ 頁、歌番号は本稿巻末の「付・隣女和歌集」（寛文十二年十一月書写本）の翻刻による。

3オ②は「哥」と「言」で対立しているが、これは両者のくずし字が似ているためにおこった誤写であると考えられる。また、3オ④の「たかひかめる」は、綱政本のみ「たかひかめる」となっているが、本文をみると、一文字目の「ひ」の下に踊り字があるようにみえることから、これもまた誤写であろう。その他の異同もほとんどが書写者による

誤脱や誤写の可能性が高いのであるが、唯一、5ウ⑥の6番歌については語彙がまったく異なるため、誤写ではないと考えられる。このような異同が生まれる原因として考えられるのは、六月本と十一月本は底本を同じくするが、綱政本のみ上記二本とは底本が異なるという可能性である。つまり、綱政の書写の段階において、二種類の「隣女集」が存在していたことがここで推測されるのである。

次に、六月本と十一月本は対立するが、六月本と綱政本が一致する場合をみてみたい。

【表二】六月本と十一月本は対立するが、六月本と綱政本が一致する場合

頁	番号	六月本	十一月本	綱政本	備考
2オ⑦	序	いとけなかりし	いとけなりし	いとけなかりし	十一月本は「いとけなりし」の「な」と「り」の間に「か」の補入記号あり
6ウ⑦	16	いくかもあらぬ	いくかもあらぬ	いくかもあらぬ	六月本は「ぬ」の下に「に」の補入記号あり
10オ⑥	46	うつりかよいか	うつりかよしも	うつりかよいか	十一月本は「も」の横に「か」と記す
19ウ④	128	ふけゆくを	更けゆけは	更行を	十一月本は「けは」の右に「くを」と記す
20オ⑥	133	いのちとかせむ	命とかみむ	命とかせむ	十一月本は「み」の右に「せ」と記す
24ウ③	172	追て吹まはず	追てまきまはず	追て吹まはず	十一月本は「文字目の「ま」の右に「ふ」と記す

※ 頁、歌番号は本稿巻末の「付・隣女和歌集」（寛文十二年十一月本）の翻刻による。

たとえば、【表二】の2オ⑦をみてみると、六月本、綱政本では「いとけなかりし」となっているが、十一月本では「いとけなりし」となっている。「か」は崩し字にするとみえにくいことから、脱落しやすい仮名である。よってここでは書写者が書き落としてしまったことによる異同であると考えられる。その他の箇所も意味が変わるような大きな異同がみ

られないことから、六月本と十一月本は対立する箇所があるものの、比較的同じ性格を有した伝本であり、また綱政本についても、【表二】で掲げた箇所については特に六月本に近い本文であるといえよう。

それでは最後に、六月本と十一月本は対立するが、十一月本と綱政本は一致する場合をみていこう。

【表三】六月本と十一月本は対立するが、十一月本と綱政本は一致する場合

頁	番号	六月本	十一月本	綱政本	備考
1ウ①	序	と思へるなるへし	と残しかつはなき後のかたみと思へる成へし	と残しかつはなき後のかたみと思へる成へし	六月本は「と」の下に「残しかつはなき後のかたみと」の補入記号あり
2オ①	序	をとをしらん	ほどをしらん	ほどをしらん	六月本は「を」の横に「ほ」と見せ消す
2オ⑤	序	心ひとつにおふるあしをも	心ひとつにひとあやまり難波江におふるあしをも	心ひとつにひとあやまり難波江に生ふるあしをも	六月本は「ひとつに」の下に「ひとあやまり難波江に」の補入記号あり
4オ⑨	序	しかり	しかなり	しかなり	
11オ⑨	55	むすひもあへぬ	むすひもあへず	むすひもあへず	六月本は「ぬ」の右に「す」と記す
15オ⑥	90	とやまふき風	とやまふきこす	とやまふきこす	六月本は「の」の右に「こす／集云」と記す
20ウ⑥	138	わかれしに	別ちに	別路に	六月本は「し」の右に「ち」と記す
23オ⑧	161	独ぬるよを	ひとりぬるかな	独ぬるかな	

※ 頁、歌番号は本稿巻末の「付・隣女和歌集」（寛文十二年十一月本）の翻刻による。

序文の異同箇所については、4オ⑨のように書写者の誤写と考えられる例が多いが、1ウ①・2オ⑤に関しては、一節が抜けてしまっている。また、23オ⑧も六月本では「独ぬるよを」であるのに対して、十一月本・綱政本では「ひとりぬるかな」と末尾が詠嘆になっている。当該箇所も書写者による誤射・誤脱と考えられなくもないが、一つの可能性としては、六月本は草稿段階の雅有自筆本を底本にしており、十一月本・綱政

本は六月本の底本よりも本文が整理された伝本を底本にしたため、このような異同が生じたとも考えられる。しかし、意味が大幅に変わるような異同は1ウ①と2オ⑤、23オ⑧（161番歌）しかなく、その他は誤写である可能性が高いことから、【表三】の箇所についても、六月本・十一月本・綱政本はほぼ同じ系統に属していると考えてよいであろう。

四 おわりに

以上、林原美術館所蔵「隣女集」三本について、その書誌と本文の特色を記した。本文の特色については、ほぼ同じ系統であると考えられるが、ところどころ誤写では説明できない異同があるため、それぞれが異なる伝本を書写した可能性も否定できない。また、同じ一本を書写したにしても、本行を書写したものと改定箇所を書いた本がかつて存在し、それぞれ本行と改定箇所を書いた結果、現状のような本文異同が生じた可能性も考えなければならぬであろう。本稿では今回発見した三本とその他の伝本との書承関係や、善本であるかどうかについての検討をおこなわなかった。それについては今後、林原美術館本以外の伝本との本文比較をおこなったうえで明らかにしていきたい。

【参考文献】

- ・『新編国歌大観CD-ROM版』角川学芸出版（二〇〇七年）、『隣女和歌集』解題（青木賢豪・田村柳壹両氏担当）

・『新編私家集大成CD-ROM版』笠間書院（二〇〇九年）、『隣女和歌集』解題（鹿目俊彦・濱口博章両氏担当）

・『和歌文学大辞典』古典ライブラリー（二〇一四年）

・『天理図書館善本叢書 和書之部 第四十四巻 平安鎌倉歌書集』八木書店（一九七五年）

・『国立歴史民俗博物館 貴重典籍叢書』文学篇 第十巻（私家集四）臨川書店（二〇〇一年）

・中川博夫「桃園文庫本『隣女和歌集』巻一翻印・解題」『国文鶴見』第四十号 鶴見大学日本文学会（二〇〇六年）

〔付記〕本研究は、平成二十八年度関西大学研究拠点形成支援経費において、研究課題「地域文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」として研究費を受け、その成果を公表するものである。また、今回の調査ならびに図版掲載を許可してくださった林原美術館に厚く御礼申し上げます。

（さかもとみき・本学大学院生）

付・『隣女和歌集』（寛文十二年十一月本）の翻刻

最後に、林原美術館所蔵『隣女和歌集』三本のうち、書写年代の古さは三本のうち二番目であるが、脱落箇所が少ない寛文十二年十一月書写本の翻刻を掲げる。

〔凡例〕

当該本は中川博夫氏によって報告された桃園文庫本『隣女和歌集』巻一の凡例にしたがって翻刻した。凡例は次のとおりである。

- 1 漢字・仮名・反復表記はそのままとし、私に句読・清濁を施すことはしなかった。
- 2 平仮名・片仮名は通行字体に統一した。漢字は底本の表記に従ったが、異体字は正字体に統一した。「歌」「詞」「哥」は区別した。
- 3 改行も底本どおりとし、改丁は、「1オ」の形で示した。
- 4 歌頭の墨鉤点は「＼」「／」で、歌頭・歌脚の朱鉤点は「＼（朱）」のごとく示した。
- 5 補入符の小星点は「○」で示した。
- 6 歌頭に通し番号を付した。番号は『新編国歌大観』に同じ。

〔翻印〕

『隣女和歌集』（表紙）

（二丁白紙）

やまとうたはみなかみひの河よりいて、
なかれたまかきの国つわざとなれり
しより代々の勅撰家々のうちき、い
にしへの後をつきて今の世に絶す成
ぬるなかに哥讀と思へる人たかきもく
たれるもみつからのうたを記て家の集と
せりかれは心の花いたつらに散うせ
言葉のはやしむなしくむれ木とならん
ことをおしみもしはすゑのよの集のため 1オ
と残しかつはなき後のかたみと思へる成
へしこゝに人並／＼に正元よりこのかたわか
のうらにかきすてもくつをひろひあ
つめて隣女和歌集といへること有さきに
いふところの詞仙たちの趣にあらず
これはた、此道にふける思にひかれてたへさ
る身をろかなる詞をかへりみすおりに
つけときにしたかひてこゝろさしをの
ふるかすを見てとし／＼にふかく
なりあさくをこたる心のほとをしらん
ためはかりに書と、めぬるをしら糸の
1ウ

このすちをはしらすくれ竹のよのつねに
 ならひてみん人は賤か、きねにさらす
 布を心ひとつにひとあやまり難波江に
 おふるあしをもわかめにはよしとみるに
 なむ成ぬへしおほよそいとけな〇りし
 よりかす／＼にかき置しことの葉度／＼
 のやとの煙に大空の霞となりにはかは過にし 2才
 弘安のはしめよりことなるふしなけれとゐな
 のさ、はらしけるにまかせてたかき見し
 かきをもいはすなほきみやきまし
 はらされはくちきのそまにまかりゆか
 めるをもきはすさなからかきのせぬ
 る朝今の人のき、のちの世のそし
 りのかる、かたなく憚多けれとねかふ
 ところは心さしのふかくてよのいとなみ
 にまきれぬかたをあはれみてつた 2ウ
 なきことはいやしきすかたをはおもひゆ
 るせとなり又題のしたい哥のほひことは
 のかきさまふるき言かやうのふし／＼
 さなからおほくかたくなにたまがひかめる
 こと身つからと、のへんとすれは老の病
 ものうくふた、ひみんはたわれ恥かしく
 いはむや人のてをからんすらかたはらいた

きによりて此道にあやめもわかぬ輩に
 まかせてかき集させぬれはうしろ 3才
 めたけれとちからなき身のいたつきに
 なんまけにたるもしみむ人この趣
 をおもひて嘲ことなくはのそむところ
 たりぬへしそも／＼わか、みは新古今
 新勅撰のすかたを心にかけ中比より
 は万葉古今等の心ちをいかてかどこひ
 ねかいへとも箕裘をたにまなひみす
 かの西施かとなりの女のかれをうらや
 めるよそほひもとのかたちよりはます 3ウ
 集の名とせりといふことしかなり 4才
 〈みにく、なりけるになすらへてこの
 集の名とせりといふことしかなり 4才〉
 (白紙) 4ウ
 隣女和歌集巻第一 正元年中
 春
 001 〳ゆきのうちのみやまのさにとたつ春は
 冬のひかすをかそへてそしる ④
 002 〳けさよりははるのとなりになりぬとや
 ふゆをへたて、かすみたつらん
 003 〳けさみれはこほりとけぬる谷川の
 したゆくなみに春やたつらむ 5才
 004 〳うくひすもかすみもをそき雪の中に

- 005 はるしるものはこゝろなりけり
 春はきぬゆきけのくもははれやらて
 さなからかすむみよしの、やま（采）
- 006 しからきのと山は雪けなをさえて
 よサトノミカミムそにかすめるはるの明ほの
- 007 ほの、と明ゆくそらを見わたせば
 やまもとよりそかすみそめける
- 008 春のきるかすみのころもたちこめて 5ウ
 よるへもみえずそてのうらなみ
- 009 もしほやくうらのけふりをたよりにて
 はるはなみちそまつかすみける（采）
- 010 み山にはなをしらゆきのふるすより
 軒はにうつるうくひすのこゑ
- 011 春きてもなを風さむきみ山木の
 かけの、くさに残るあはゆき（采）
- 012 霞めともまたみとりにはなりやらて
 かれの、くさにのこるしらゆき（采） 6オ
- 013 いつくにもむめか、そする春の日の
 いたりいたらぬさとのなけれは
- 014 古郷のおいきの梅はさきにけり
 むかしのはるの色をのこして
- 015 あさみとりなひくもしるし青柳の
 いとかのやまの峯のはるかせ（采）
- 016 春きてもいくかもあらぬ〇いつしかと
 こゝろにかかるはなのしら雲（采）
- 017 くもは、な花は雪とやまかふらむ 6ウ
 そらにかすめるかつらきのやま
- 018 みよしの、山のさくらの花さかり
 みねにもおにもかゝるしらくも（采）
- 019 よし野山はなよりおくのしら雲や
終古今かさなるみねのさくらなるらん（采）
- 020 ふもとよりいくへの雲をわけすて、
 しらぬやま路の花をみるらむ
- 021 みよし野、はなのか、みとみゆるかな
 あをねかみねの春の夜の月 7オ
- 022 くれぬとも月にはみてん春のよの
 やみはあやなきはなさかりかな
- 023 も、しきやおほうち山のさくらはな
 雲井にふかくにほふはるかぜ
- 024 たちはなのほひならねとふるさとの
 軒のさくらにむかしこひつ、
- 025 いさ、らは散なはなけの花さくら
 かせよりさきにおり盡してむ
- 026 雪（采）と降はなにのきは、うつもれて 7ウ
 さくらをふける春のやまさと（采）
- 027 をのつからこゝろとけさは散はて、

- 028 さそふかせをもまたぬ花かな
 けさふかはいかに風をもかこたまし
 のとけきそらにちるさくらかな
- 029 峯のくもみきはなみそさはくなる
 ひらやまかせに花やちるらむ 〔兼〕
- 030 かへるへきならひなりとも春のかり
 ことしはかりははなにやすらへ 8才
- 031 さすかまたはななこりやおしからん
 なきてわかる、春のかりかな
- 032 名のみしてときは山の岩つゝし
 みとりにかゝるはなもさきけり 〔兼〕
- (二行空白)
- 夏
- 033 わかさりしうの花かきも白たへに
 さきあらはる、夏はきにけり
- 034 しつめかさらせるぬのや山さとの 8ウ
 かきつのに、さける卵の花
- 035 としことをそさになれてほととぎす
 またぬうつきのそらになくなり
- 036 待わひぬをかさつきの空にたに
 なをもつれなきほと、きす哉 〔兼〕
- 037 入日さすくものはたてのをりはへて
 鳴やさつきの山ほと、きす 〔兼〕
- 038 す、か山明かたちかきせきの戸を
 入鏡子 ぶりいて、なく郭公かな 〔兼〕 9才
- 039 夏のよの在明のそらのほと、きす
 おなしね覚の人やきくらむ 〔兼〕
- 040 なげやなけさよのね覚の郭公
 ふたこゑき、ておもひ出にせむ
- 041 一こゑはゆめとおもひておとろけは
 うつ、なりけるほと、きすかな 〔兼〕
- 042 しられけりひけるあやめのなかさねに
 またみぬ、まのそのふかさも
- 043 あし引のとを山をたに袖ぬれて 9ウ
 いくほともなき早苗とるらし
- 044 五月雨はひかすふれともなにはかた
 もとのみきはをこえぬしら波 〔兼〕
- 045 さみたれにあまのかは浪たか、らし
 月のみふねのわたるよもなき
- 046 たか袖のうつりかよりもたはなを
 〔むかしこと、ふつまとなしけむ 〔兼〕
- 047 みしかよとさこそはいはめ月影の
 入をもまたす明るそらかな 〔兼〕 10才
- 048 さみたれにきえぬうふねのか、り火や
 かつらのかはのほたるなるらん
- 049 木かくれにしつみなかる、山の井の

あかくもなつの日をくらすかな

(二行空白)

秋

050 うた、ねのたもとをかけてふく風の
めにみぬいろに秋をしるかな

051 ひさかたの空になかれぬ銀河
なをほしあひの影そみえける
10ウ

052 秋の露たかたまくとむすふらん
入の、す、きほにいてにけり

053 なか／＼にちくさの花もなきのへの
しの、をす、き風そさひしき

054 むさしのやちくさの花はいろ／＼に
をきかへてける秋のしらつゆ

055 秋かせの吹しくをの、浅茅はら
むすひもあへす露そこほる、

056 秋もた、おもへはおなしゆふくれを
なかめからにやさひしかるらん

057 はるはこし秋は都にくるかりの
いつもたひなる音をや鳴らん

058 秋風にかりはきにけり白雲の
みちゆきふりにこゑそきこゆる

059 ひさかたの天とふかりのおほひはに
はつしもふりぬ在明のそら

060 しからきの外山にかせやむかふらん
おのへのしかのこゑよはるなり
11ウ

061 ふき送るみ山あらしにつたひきて
さとまでかよふさをしかのこゑ

062 むらしくれはれゆく雲のをひかせに
山めぐりするさをしかのこゑ

063 宮城の、このしたつゆにたちぬれて
いくよかしかのつまをこふらむ

064 ね覚してなをのこすよも長月の
あり明の山のさをしかのこゑ

065 ひさ型の月こそあらめ明ゆけは
しかのこゑさへやまに入らむ
12オ

066 うつらたつあさちの葉すゑうちなひき
ゆふへの露に秋かせそふく

067 ゆふされはくさ葉のつゆをふき過て
なみたをさそふ袖の秋風

068 さひしさはゆふへのかせと思ひしに
うすきりまよふあけほの、そら

069 やまのはに待よの月はいてにけり
このさと人やいねかてにする
12ウ

070 くもりなき空すみわたるなかき夜の
つきのみふねのやまの秋かせ

071 山さとの庭の萩はら露散て

- 072 身にしむいろの月そさひしき
 おきあかす露のよすから影とめて
 月にやとかす庭のおきはら（采）
 073 〳〵さしのは心盡しの山もなし
 またれんものか秋のよの月
 074 〳〵神もさそ秋もなかはといはし水
 なに流たるつきはみるらむ（采）
 〳〵諏磨のうらせき吹こゆる秋風に
 月さひわたる波の遠かた
 075 〳〵月影はよるともみえずみつしほの
 なかれひるまのこゝちのみして（采）
 〳〵あかしかたあかてかたふく晨明の
 月ふきかへせ沖つしほかせ
 076 〳〵しはの廬まつのみ戸もまはらにて 13ウ
 〳〵まよりいつる在明の月
 〳〵きり〳〵すなにを恨みて浅茅生の
 あり明のつきに音はつくすらん（采）
 077 〳〵たひねする野風をさむみきり〳〵す
 くさのまくらのしたに鳴なり（采）
 〳〵ふるさとのにはのあさちふうらかれて
 むしの音よはき秋のゆふしも
 〳〵吹過る風ならねともおきの葉に
 をとつれてふる秋のむら雨

13才

- 083 〳〵紅葉はをのれと染るいろなれや
 ときはの山もしくれふるなり
 084 〳〵山人の袖もいろにやいてぬらん
 つたはひかゝる谷のしたみち
 085 〳〵もみち葉をよるさへみよとてる月の
 ひかりさやけきかみなひのもり
 〳〵をしかなく在明の比の山のはに
 もみちをわけていつる月かけ
 086 〳〵露しもにかねてこのはのうつろひて 14ウ
 〳〵しくれをまたぬ神なひの杜
 〳〵（二行空白）
 〳〵冬
 〳〵かみな月しくれすとてもあかつきの
 〳〵ね覚は袖のかはくものかは（采）
 〳〵入新後神無月ふゆのはしめはかきくもり
 〳〵しくれはさためありけるものを
 〳〵あくるよのとやまふきこす木からしに
 〳〵しくれてつたふ峯のうき雲（采）
 〳〵たかねにはゆふひさすなりいこま山 15才
入續拾
 〳〵ふもとのさとのくもはしくれて
 〳〵なにゝかは紅葉のぬさをたむくらん
タカクメニ
 〳〵しらすやあらし神なつきとは
 〳〵さひしさをいかにしのはん神な月

14才

- 094 かせにしくれて木の葉ふる比
 くれなるにいはなみたかしみなのかは
 おなしたかねに紅葉散らし（巻）
- 095 〱かたおかのは、そのこのはちりはて、
 にはにをとする山下風のかせ
 〱風さむみひかけにもる、山したの
 〱くち葉かうへに残るあさしも
 〱音寒し夕しもむすふ浅茅生の
 〱かれはのをのにあらしふく也
 〱やまさとの岩のかけちのしもくつれ
 とはんといひし人もまたれす
 〱むらさきにかはりしはなも霜をけは
 〱またしらきくとうつろひにけり
 〱またふらぬゆきけのそらの雲をみて
 〱かねてこりをく山のしたしは
 〱した葉よりかへぬみとりはほのみえて
 はつゆきうすき岳野への松
 〱残なく拂ふもかせのこゝろにて
 たゆめはつもる松のしらゆき
 〱とにかくに冬はやまちそたえにける
 このはの後はつもる白雪（巻）
 〱けさみれは秋さく花のあともなし
 ゆきそふるえの宮城の、はき（巻）
- 16ウ
- 105 〱さえ〱し雲は、れぬる山のはの
 ゆきよりいつるあり明のつき
 〱難はえやしほせふきこす浦風に
 〱かれ葉たになきあしのむらたち
 〱なにはかたゆふしほみちて蟹の住
 いそやにちかく啼ちとりかな
 〱さよちとりなくこゑ寒し晨明の
 〱月のてしほやみつの濱風（巻）
 〱心あるあまそきくらむ松しまや
 をしまのちとり月になくこゑ
 〱冬もなをあさきよとみそ氷ける
 たきりておつるうち川の水
 〱すはのうみや船路はたえてこのころは
 こほりのうへをかよふかちひと
 〱山さとのかけひのみつは音たえて
 こほりもゆめもむすふころかな
 〱なみこゆるうちの川瀬のあしるぎに
 いさよふつきの影のさむけさ
 〱いかにせむあかてかたふく月かけに
 しくれてむかふみねのうき雲（巻）
 〱ふしのねはまたも有けりゆきのうへに
 けふりそなひくをの、すみかま
- 恋
- 17オ

- 116 〳あやしくもななかめかちなるゆふへかな
わかこ、ろこそひころにもにぬ
- 117 〳枕たにしらぬおもひをいか、せむ 18才
うちぬるほどもあらはこそあらめ
〳としをふるやとにしけれ忍ふくさ
した葉のつゆよ人めもらすな
- 119 〳かくはかり人めをつ、むおもひありと
ちらすなつゆの袖のあきかせ
- 120 〳人やきくけしきはいろにみえねとも
しのふの山の松の秋かせ
- 121 〳逢事はたれゆへつ、む恋ちとて
おもひもしらす人のつれなき 18ウ
- 122 〳あまころもぬれそふ袖のうらみても
みるめなきさにもしほたれつ、〳
〳あらくまのすむなる山のおくまでも
- 123 〳きみたにあらはゆきてたつねん
〳ひろせかはそてつくはかりたつぬれと
あふせもしらぬ身をいかにせん
- 125 〳いのらすよいなりの山のすきのはの
つれなき色に人ならへとは
- 126 〳〳^(兼)きえかへりまつゆふくれの空の雲 19才
むなしきはてはうちしくれつ、
〳待わひぬたのめてもこぬいつはりは

- 128 〳たかならはしのゆふくれのそら
〳たのめつ、くらせるよひの更けゆけは
かこちかほなる袖の露けさ
- 129 〳たのめつ、こぬいつはりをまつの戸の
さ、て幾よか夜をあかすらん
〳われのみやうきみかりの、ならしはの
ひとよもなれぬ人をこひつ、 19ウ
- 131 〳しらせはや逢せもしらぬかたふちの
やかてもふかきこひのこ、ろを〳
〳あふせなきわかこひかはをゆく水の
ふかきよとみに袖やくちなむ
- 132 〳〳^(兼)あはてのみた、いたつらに恋しなは
なに、かへつる命とかみむ^せ
- 134 〳わかこひはあふをかきりと思ふ身の
ひをふるま、によはりぬるかな
- 135 〳ひとよとてあたにやおもふさ、竹の 20才
このよはかりのちきりならしを
- 136 〳〳^(兼)あふ事はたまさか山のたにかくれ
したゆく水のかかくれてのみ〳
〳あかさりしけさのなこりを身にそへて
またねのとも起うかりけり
- 138 〳別ちななかめし月の有明は
つらきなからのかたみなりけり

- 139 馴し夜はならへしとこのまくらにも
ぬるよなけれはうとくなりつ、(采) 20ウ」
- 140 〳わたりけむあふせもみえず飛鳥川
きのふにかはる人のこゝろに、(采)
- 141 〳我ならはこよひの月にさそはれて
おもはぬなかのひととひなん
- 142 〳たつねゆくわかしるへせよ夜半の月
馴にし袖のつゆのおもかけ
- 143 〳風ふけはた、よふ雲のなかそらに
うきておもひのきえやはてなん、(采)
- 144 〳なかめやるそなたの雲をたよりにて
そてにしくる、わかなみたかな 21オ」
- 145 〳けふりたつおもひはたれもするかなる
ふしのたかねをよそにやはみる
- 146 〳煙たつむろのやしまは遠けれと
くゆるおもひのかよふころかな
- 147 〳もしほやくなにはをとめかあしのやの
ひまなく、ゆるしたけふりかな
- 148 〳わか袖につれなきなみはかけなから
月ひそこゆるす糸のまつ山 21ウ」
- 149 〳いせ嶋やしほひのかたによる浪の
いやとをさかななかつれなき
- 150 〳時雨にはつれなき山のまつたにも

- 151 〳さそふかせにはなをなひきけり
一よとてかりねの、へのさ、まくら
むすひし露のちきりわするな
- 152 〳恋しともたれにいひてかなくさまむ
おなしこゝろの人もなき世に、(采)
- 153 〳つれもなきひとをかならず恋よとは 22オ」
こゝろよいかたれかをしへし
- 154 〳いとせめて物おもふときの筆すさみ
た、かくことはこひしとそいふ
- 155 〳よしさらはこゝろのまゝにうらみてん
つらきを人のおもひしるやと
- 156 〳さすか又こゝろやかよふつれもなき
人もゆめちにあひみつるかな
入簾子 フサカクヤマ
- 157 〳いかにせむはなにこゝろそうつりぬる
みやまかくれのくち木なる身も 22ウ」
- 158 〳しけかりしことのはやまのあをつ、ら
おもひたえてはくる人もなし、(采)
- 159 〳あはてのみとしふるさとの軒のくさ
かれねわする、言の葉もうし、(采)
- 160 〳身をしれはうらみんとしも思はぬに
こゝろにあらすぬる、袖かな
- 161 〳しらせはや人をうらみのこひころも
なみたかさねてひとりぬるかな
入新後

162 〱まれにてもあひみはとこそ思ひしに 23才」
 〱たえぬはひとのうらみなりけり 〱
 163 〱ふえ竹のひとよのふしのうきねのみ
 なく 〱人をうらみつるかな
 164 〱あら磯にうちすてらるゝわすれかひ
 わすれす人をうらみつるかな 〱
 雑
 165 〱別路にいとひなれたるつらさにて
 さならぬよはのとりの音もうし
 166 〱はる 〱と都をよそにへたつなり 23ウ」
 越ゆくやまのあとのしら雲 〱
 167 〱しからきのとやまにふかき夕けふり
 よにたつ人のすみかならしを
 168 〱あまのはらふりさけみればあつま路や
 〱ふしのけふりに秋かせそふく
 169 〱ふしのねはいかなる神のちかひにて
 つれなきゆきの山となりけむ
 170 〱ゆふされはしほやみつらん伊勢の海
 ひかたにむかふ沖つしらなみ 24才」
 〱おなしくはみやこへさそふなみもかな
 171 〱みつのこしまは人ならずとも
 〱むろのとや追てまきまはす夕風に
 172 〱かたほにかけてよするあまふね

173 〱はる 〱とよふねこくなるこゑすなり
 〱ひらのみなとの在明のそら
 174 〱たひ人のかちの、はらにひはくれぬ
 〱いつれのくさに枕むすはむ
 175 〱ゆきくれぬいさやとからんまつ風の 24ウ」
 〱こゑするかたやすみよしのさと 〱
 〱世をいとふみ山のいほのさひしさに
 176 〱またうかれぬるわかこゝろかな
 〱かた山のそはのいしゐのさゝれ水
 177 〱あさましき身はすむかひもなし 〱
 〱つゝらはふやまのこさかの道せはみ
 〱くるしきものを世をわたるみは
 178 〱うかりけるみやまかくれのいはね松
 〱いろもかはらてくちやはてなん 〱 25才」
 〱うきことのなをみにそは、いか、せん
 179 〱よしの、おくに世をいとふとも 〱
 〱世中はかくこそありけれにこり江の
 〱堀江のみつのすみかたのみや 〱
 180 〱なにことか今はあらんとおもへとも
 〱身のゆくすゑそさすかゆかしき 〱
 〱行すゑのあらましことになくさみて
 181 〱はかなく過す月日なりけり 〱
 〱うき身にもなを行末そまたれける 25ウ」

185 きみかみかけをたのむはかりに（米）
なかきよにまよふうきみのしるへせよ

わしのみやまの晨明のつき

186 君か世はなからのはまにひろふとも

つきぬまさこのかすも

かきらし

（一行空白）

已上八百八十六首

墨者中書大正御點
朱者右部尚書點也

26才

右愚詠去正元二年之春依竹園

之召所書進三百首之内也兩方

無點哥等除之畢

（一行空白）

正應五年五月日書之前參議藤原朝臣

（一行空白）

勅點十八首 頭朱

永仁元年十二月十二日被返下之

26ウ

（一丁白紙）

27才

（二行空白）

此一帖者參議藤原雅有卿之以

自筆本書写之畢

（二行空白）

寛文十二壬子年仲冬念四

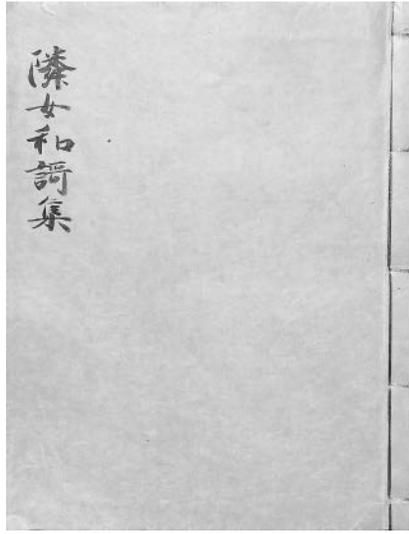
27ウ

（三丁白紙）

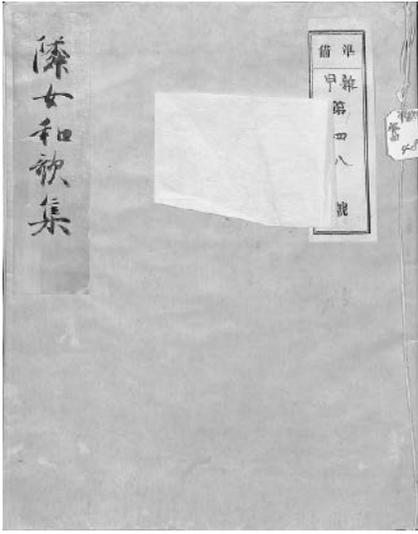
〔後表紙〕

【図版】

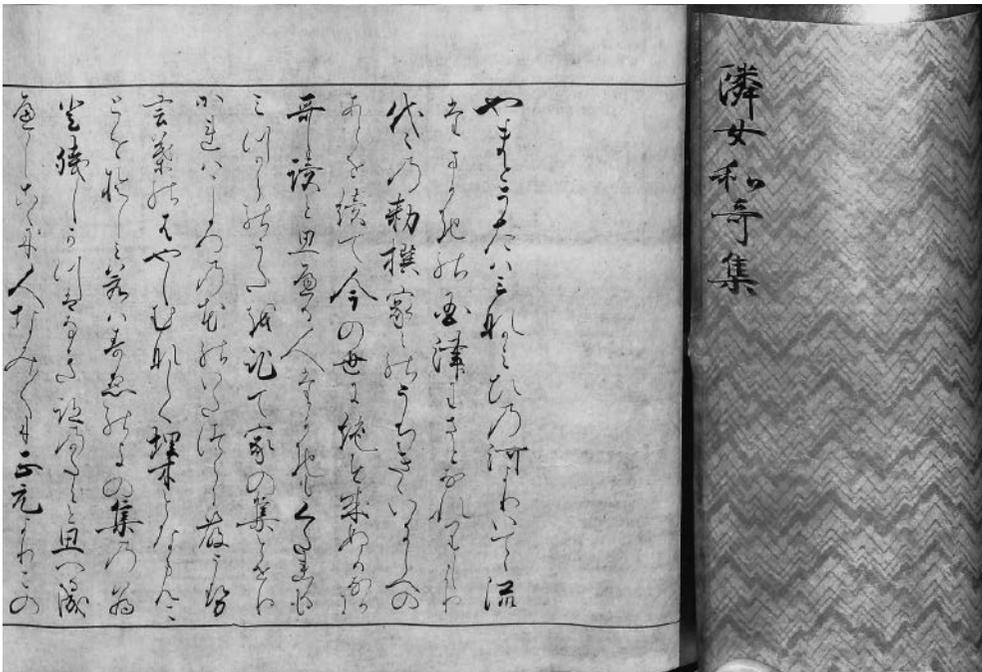
図版1 池田光政筆「隣女和歌集」寛文十二年六月書写本 表紙



図版2 池田光政筆「隣女和歌集」寛文十二年十一月書写本 表紙



図版3 池田綱政筆「隣女和歌集」表紙・仮名序

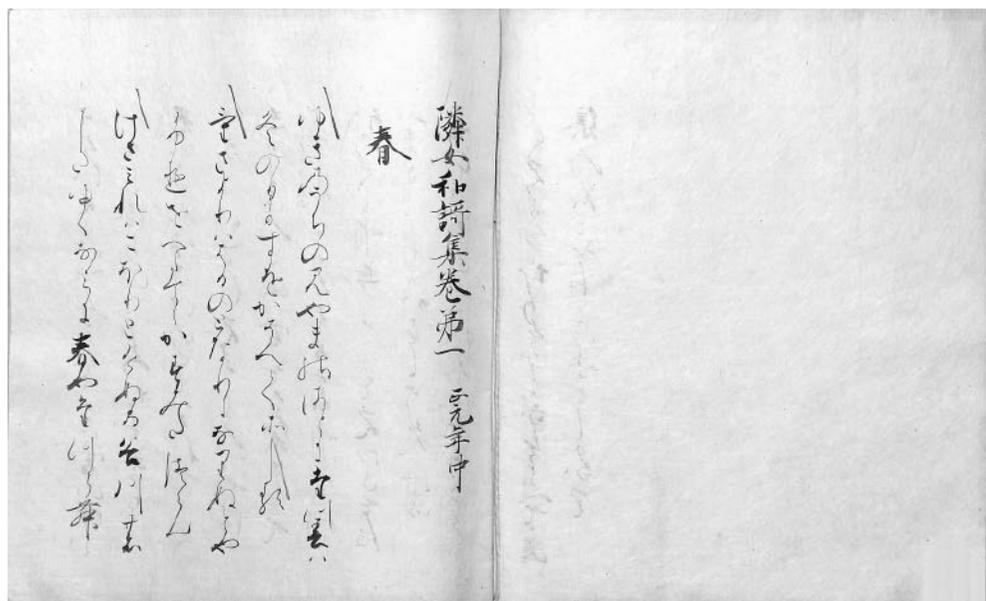
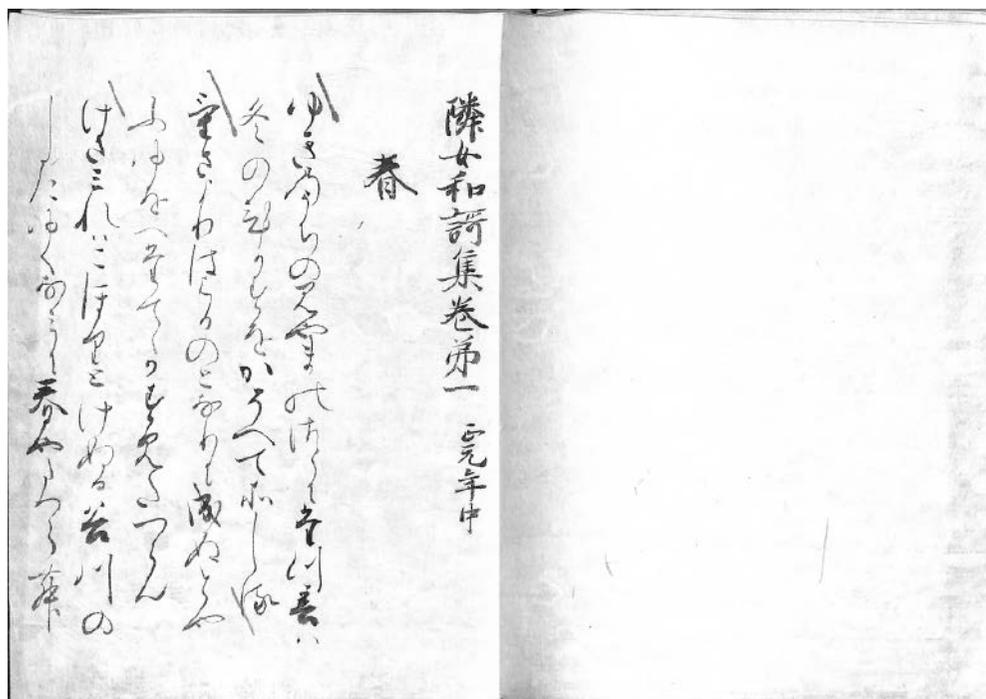


図版4 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年六月書写本 仮名序

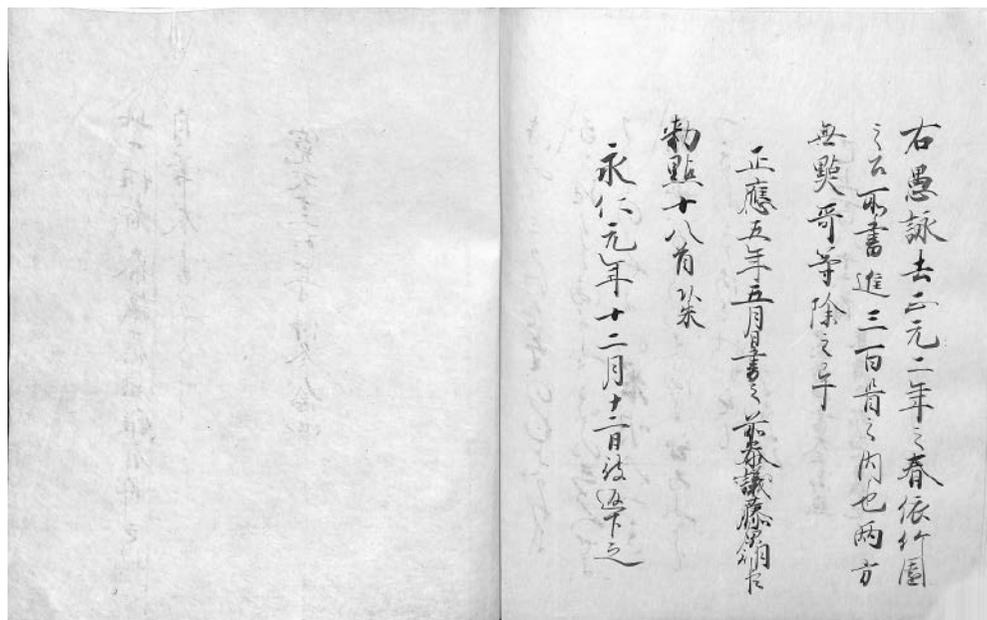
やほむらたみれふまの河わいておれ
 をふりては國にけりまはまはわい
 作の勅撰家のうらまきつらまの
 けいさくしよのせよをくんありわか
 うの奇蹟をおつたきもしくれあ
 るといひのうらまきつらまの家集
 をわらまき心のふれつらまのうら
 まきのふれつらまのうらまきの
 うらまきのふれつらまのうらまきの

図版5 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年十一月書写本 仮名序

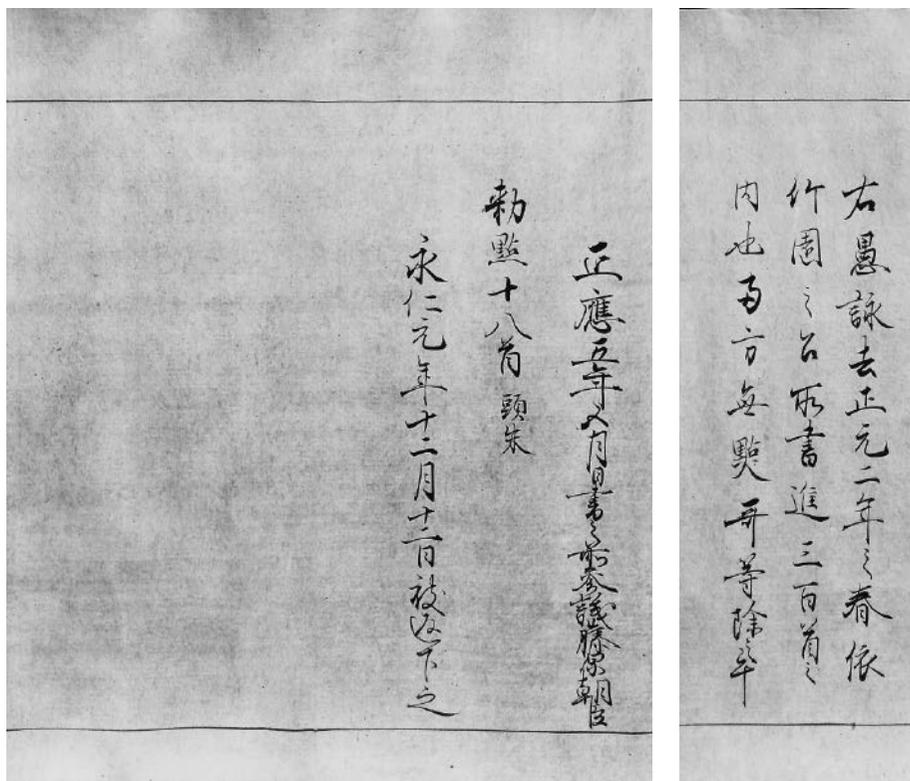
やほむらたみれふまの河わいておれ
 をふりては國にけりまはまはわい
 作の勅撰家のうらまきつらまの
 けいさくしよのせよをくんありわか
 うの奇蹟をおつたきもしくれあ
 るといひのうらまきつらまの家集
 をわらまき心のふれつらまのうら
 まきのふれつらまのうらまきの
 うらまきのふれつらまのうらまきの



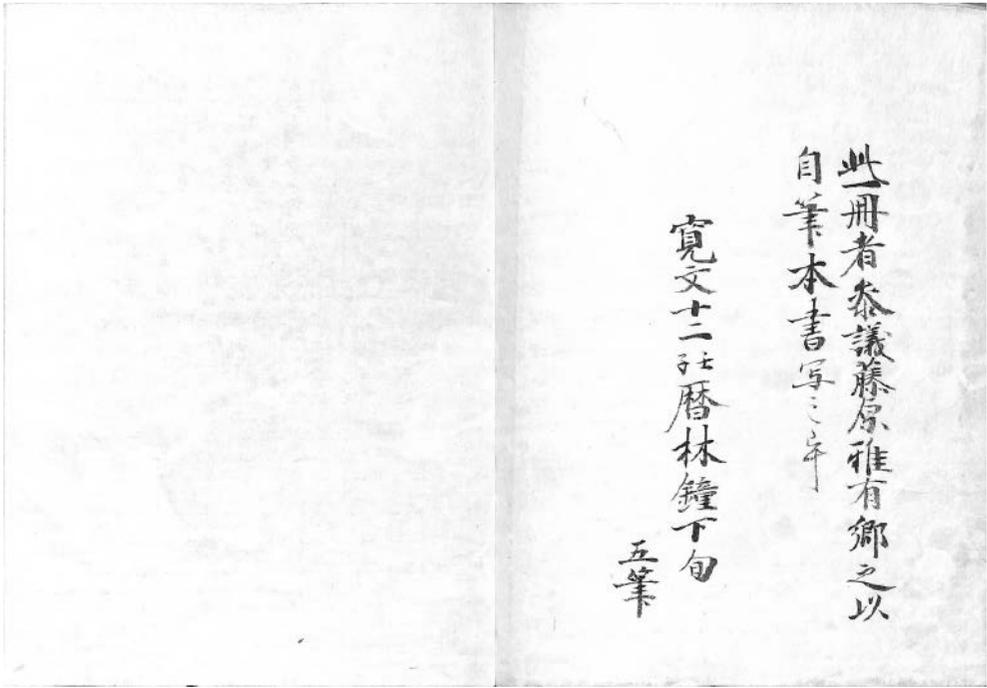
図版10 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年十一月書写本 本奥書



図版11 池田綱政筆『隣女和歌集』本奥書



図版12 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年六月書写本 書写奥書



図版13 池田光政筆『隣女和歌集』寛文十二年十一月書写本 書写奥書

